

令和元年度佐賀県立伊万里農林高等学校(佐賀県立伊万里実業高等学校 農林キャンパスを含む)学校評価結果

1 学校教育目標 ○知・徳・体の調和のとれた人格の完成を目指すとともに、農業教育を通して豊かな心・勤労観・職業観を育み、地域社会の発展に貢献できる人材を育成する。 ○初代校長が示された「綱領」5か条(至誠一貫、勤労の習慣、敢為進取、規律遵守、心身鍛錬)を基本とする学校生活づくりをめざす。	2 本年度の重点目標 ○スローガン「農林 マナーアップ宣言」 ・挨拶マナーアップ ・身だしなみマナーアップ ・学ぶ姿勢マナーアップ ①基本的な生活習慣の確立とマナーの向上 ②魅力ある学科づくりと地域とのつながりの推進 ③学力向上 ④希望進路実現100%達成 ⑤危機管理意識の向上 ⑥部活動の推進とボランティア活動の充実 ⑦働き方改革の推進
---	---

3 目標・評価

①基本的な生活習慣の確立とマナーの向上

領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生徒指導	基本的な生活習慣の確立が図れたか	・延べ遅刻者数の前年度比3割減、全体出席率98.5%以上、特別指導者数の前年度比3割減をめざす。	・日々のHR指導の中で、規則正しい生活と時間を守ることを大切にし繰り返し指導する。 ・学年・学科・分掌の連携による生徒情報の共有と、組織的な指導体制の確立を図る。	B	・遅刻者数は前年度より若干増えたが、出席率は97.9%と前年度の97.1%より良くなった。しかし、目標の98.5%は達成できなかった。 ・特別指導者数は、前年比の4割で激減した。	・遅刻が多かったり欠席が続く生徒に対し、なお一層の家庭状況等の把握と情報共有に加え、組織的かつ保護者と連絡を密にした指導に努める。 ・特別指導件数の減少に向けては、更なる部活動加入や資格取得等の推進から、基本的な生活習慣の確立につなげたい。
		挨拶マナーアップに取り組めたか	・生徒の80%以上が好感の持てる挨拶の励行に取り組めたと実感できるようになる。	・生徒一人一人が人間関係を築く上で、「なぜ、挨拶が必要であるか」を十分理解させ、挨拶の指導を集会や授業で行う。 ・社会人として必要な言葉使い、ビジネスマナーを日ごろの教育活動で指導する。	B	・生徒アンケートで挨拶励行ができたと答えた者が73.3%であった。日頃の生徒の状況やマナー指導に対するアンケートでは、保護者・職員ともに前年と比べると改善されている。	・少しずつ改善されつつあるが、地域の評価を含め、なお一層の努力が必要な状況にある。今後、生徒自らの意志で相応しい挨拶・身だしなみ等がとれるよう、指導の在り方をあらためて検討する。併せて、学年・学科・分掌が連携し組織的な指導となるよう、課題の共有と意識の統一を図る。 ・身だしなみについて、表面上の改善だけでなく、内面的な部分での意識改善に取り組む。特に、新高校での両キャンパスでの差が生じないように、両校での統一した指導を積極的にやっていく。
		身だしなみマナーアップに取り組めたか	・生徒の80%以上が服装や頭髮のマナーアップに取り組めたと実感できるようになる。	・日々の「チェックカード」による個別指導を全職員の共通理解と共通指導により実践し、保護者と連携した正常化を図る。 ・全校集会を効果的に実施し、生徒の意識向上を図る。 ・日々のHRや学年集会をとおして、マナーアップに向けた指導と雰囲気づくりに努める。	B	・生徒アンケートで相応しい身だしなみができていると答えた者が75.3%であった。しかしながら、日頃の生徒の状況や職員アンケートではまだ徹底していないとの評価となっている。	
		マナーアップに向けて、職員一丸となって指導に取り組めたか	・マナーアップに向けて全職員が意識をもって指導に取り組む雰囲気をつくる。	・毎週火曜日、全職員での校外登校指導を実施し、校外での身だしなみと交通安全指導、マナーアップ指導を行う。	B	・アンケートでは75.1%の職員が組織的に取り組んでいると回答している。少しずつではあるが、縦横の連携が図られつつある。	・学年・学科・分掌の連携により生徒指導の共有化を図り、マナーアップを意識して挨拶や身だしなみ指導を組織的にやっていきたい。
	●心の教育	他人を思いやる気持ちや豊かな心の育成が図られたか	・他人への思いやりのある言動がとれる生徒90%以上をめざす。	・地域連携の取組やボランティア活動における地域の方々とのふれあいに加え、人権・同和教育に関する講演会や日々のHR等をおとして、人間性豊かな生徒の育成を図る。	B	・生徒アンケートでは、他人の立場に立った言動を心がける割合は、目標の90%以上には届かなかったが、82.6%と高まっている。	・地域連携の活動やボランティア等のイベント的な取組に加え、日々のHR活動での周囲との関わりをおして豊かな心の育成に努める。 ・動植物が教材の農業高校の強みを生かし、引き続き意識を持って「命の教育」につながる実習指導に努める。
●いじめ問題への対応	いじめの根絶に向けた、生徒の意識向上が図れたか	・「いじめは絶対に許されない」という意識を持つ生徒100%をめざす。	・LHRでいじめ防止のための標語づくりを行い、校内に掲示し、いじめを許さない雰囲気づくりに努める。 ・日々のHR等で、初期のいじめ事象発見に努めるとともに、HRや学年集会等で、いじめ防止と人権尊重についての指導を徹底する。	B	・いじめ防止の標語を校内各所の掲示板に掲示し、日頃からいじめ防止の意識を持たせる指導を行ってきた。 ・職員による校内巡回等を組織的にを行い、生徒たちの行動の死角となる面を減らすことで、いじめ防止の取り組みを行った。	・SNSによるいじめ防止に向けて、安易な書き込みが相手を傷つけることを、HRや集会、講演等をおして教育していく。 ・生徒の細かな変化も見逃さないよう、職員の情報共有と連携を行い、組織的な対応に取り組む。	
●健康・体づくり	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成が推進されたか	・朝食を摂って登校する生徒の割合を90%以上にする。	・保健だよりを毎月発行するとともに、朝食に関するアンケートを実施し、朝食を摂ることの大切さを理解させる。 ・面談等をおして保護者に理解を求める。	B	・保健だよりやPTA総会資料等で朝食についての重要性を紹介し、望ましい食習慣の形成ができるように促した。朝食に関するアンケートの結果、82%の喫食率で、前年度より5%の増加となった。	・朝食の喫食率は前年度より5%増の82%となったが、目標の90%以上には届かなかった。就寝時間と起床時間が遅いため、朝食を摂れない生徒が多い。生活リズムを整え、自己管理できるよう働きかけることが今後の課題であると考えている。	

②魅力ある学科づくりと地域とのつながりの推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○魅力ある学科づくり	農林業の実習や商品開発・販売実習の充実が図られたか	・学科の専門学習への興味関心度80%以上をめざす。	・中学生への学科PRも視野に入れた学習の工夫・改善と新しい分野への取組等に、学科職員が意識をもって取り組む。	B	・生徒の78.6%が、興味関心をもって専門学習に取り組んでいると回答した。	・魅力ある実験・実習の展開に向け、引き続き内容の工夫・改善に取り組むとともに、県内外の学校での、特色をもった実践事例の情報収集に努める。また、地域との連携強化に取り組む。
	○農業クラブ活動	農業クラブ活動をとおした、専門教科に関連する知識・技能の向上が図られたか	・農業クラブ県連大会で、チーム・個人を含め、5部門以上での最優秀・優秀等の入賞をめざす。	・校内での選考方法を改善することで、早期の指導体制を確立させ、徹底した反復練習に取り組むことで、レベルアップを図る。	A	・農業クラブ県連大会の成績は、意見発表1、プロジェクト2、家畜審査1、農業鑑定競技2、フラワーアレンジメント1と7つの最優秀賞を獲得した。 ・全国大会農業鑑定競技では、食品分野で優秀賞1名の成績を残した。	・次年度も引き続き、校内での選考方法をより一層よいものに改善し、目標である5部門以上での最優秀・優秀の入賞を目指す。 ・全国大会へ一人でも多くコマを進め、優秀賞を目指す。
	○地域と連携した研究活動・交流活動	保護者や地域の方の積極的参加が図られたか	・農業文化祭や学校開放講座を充実させ、来校者・参加者数の増加をめざす。	・各科の展示内容・体験実習内容の工夫を図るとともに、生徒が前面にでる校外向け活動の企画と広報活動に努める。	A	・農業文化祭には1,200名近くの来校者があり、本校の学習成果を紹介できた。 ・6回開催した学校開放講座や食品化学科のカフェにも、多くの地域の方に足を運んでいただき、本校教育活動への理解につなげることができた。 ・生産物販売会の「旬の駅のうりん」を1回にし、今年度より、地元スーパーの店先で定期販売するようにしたが、どちらも多くの地域の方が足を運んでいただき、好評であった。	・農業文化祭は、これまで以上に展示の内容や新しいイベント等の企画と充実をめざす。 ・学校開放講座については、これまでの内容を更に充実させた特徴ある講座に努める。 ・地域に根付きつつある食品化学科のカフェについては、今後とも定期開催に努める。
学校運営	○タイムリーな情報の発信	中学校へのPRの推進されたか	・体験入学参加者数 250人(引率含む)以上をめざす。 ・新高校の教育内容等の周知と広報活動の充実させる。	・新高校の学習内容がよくわかる、中学生にとって魅力的な体験入学になるよう検討する。 ・新高校のことがよくわかるパンフレットの作成とPR方法の展開と充実を図る。	B	・体験入学参加者は176名(中学生153名、引率・保護者26名)と、昨年度の132名を上回ったが、目標には達しなかった。	・体験入学の体験実習内容については、形骸化を避けるため内容に大なり小なりの変化を加え、学校側にとっても新鮮味のあるものを準備し、より魅力的な体験入学となるよう工夫・改善に努める。
		学校行事や教育内容の情報発信がなされたか	・学校だより(至誠)の毎月発行と内容の充実を図る。 ・学校ホームページを毎月更新する。 ・行事やイベントごとに積極的なプレスリリースを行う。	・特色ある教育活動の集約と編集に向け、各学科からの情報提供の推進と内容の充実を目指す。 ・HPは常に最新の情報掲載に努めるとともに、携帯版サイトによる情報発信を推進する。	B	・学校だよりは8回発行となり、毎月の発行ができなかった。 ・HP更新も、月1回程度に留まり、目標が達成できなかった。また、携帯版サイトによる情報発信については、登録時の安全確保に向けて、概ね活用できた。	・「学校だより」については、行事の把握・取材・編集に向けた担当者の意識高揚により、内容の充実を図る。 ・HP更新は、必ず掲載する行事等をリストアップし、タイムリーな更新となるよう努める。 ・携帯版サイトについても、なお一層の情報発信に努める。
③学力向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策			
教育活動	○教職員の資質向上	授業力の向上と授業改善がなされたか	・生徒のアンケートで、「授業満足」の割合を80%以上にする。	・全教諭・講師による公開授業を実施し、参考となる点や課題、生徒の様子等の情報共有から、全体的な授業力向上につなげる。	B	・生徒の授業や実習における満足度は79.9%であった。教職員の「わかる授業」に向けた教材研究や授業改善に取り組んだと回答したのは90.7%であったが、授業の工夫に対する生徒の評価は74.1%に留まった。	・生徒の「わかる授業」に対する意識と教職員の意識との間に差があることから、生徒の学力や学習意欲等の実態に応じた授業改善が望まれる。そのために、授業の工夫・改善にむけた検討会を積極的に行うことで、全体の意識向上に努めたい。
	●学力向上	基礎学力の向上と定着が図られたか	・「朝学習の時間」に主体的に取り組む生徒の割合を90%以上にする。 ・全生徒の年間での小テスト平均点を70点以上にする。	・「朝学習」「朝読書」「小テスト」をわかりやすく年間計画の中に組みこむことで、効果的な朝の学習体系を確立する。 ・分掌・教科・学年団(正副担任)が連携して指導充実とクラス全体の雰囲気づくり努めるとともに、事後指導の充実・徹底を図る。	C	・小テストを金曜日に行い、朝学習の成果を効果的に反映するように設定した結果、72.9%の生徒が前向きに取り組んだと回答した。しかしながら、職員アンケートでは46.9%と低かった。 ・クラスにより朝学習への取り組みに差があり、小テストの結果のクラス差が顕著であった。	・朝学習に使用する教材を生徒の実態に合わせて選定し、年間を通した学習計画を設定することで、更に効果的な学習体系を確立する。 ・クラスによる差を改善するために、学年団としての事後指導を徹底し、全体的な学力と定着率の向上を図る。
	○教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	教職員のICT利活用能力向上が推進されたか	・アンケートで、「積極的なICT活用の授業実施」に努める教職員の割合を80%以上にする。	・毎学期「ICTを活用した授業の公開授業週間」を設定することで、授業者の利活用意識の推進と参観者の利活用方法の改善・検討を図る。	C	・職員のアンケートで、積極的に活用した12.5%、おおよそ活用した59.4%と、目標を大きく下回った。また、教科によりICT利活用頻度にバラツキが見られる。	・授業の中で、ICTを活用する場面やタイミングを的確に見極められるよう、引き続き研修に努める。 ・とくに学習用PCについては、デジタル教材の積極的な利活用はもとより、情報モラル教育の推進を含め、教科・学科を問わず全体的な技量向上を図る。

④希望進路実現100%達成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の充実が図られたか	・自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答える生徒が80%以上を目指す。	・すべての教科等、学校行事を通して、夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。	B	・自分の進路目標を考え、意欲的に教育活動に取り組めた生徒はアンケートで70%であった。	・学校全体で、生徒に早い段階から進路目標を持たせ、あらゆる教育活動を通して、生徒に達成感や充実感を持たせる必要がある。
	○進路指導	生徒の希望進路への実現が達成されたか	・進路決定率100%(10年連続)を継続する。 ・国立大学、学科関連大学等への進学者増を目指す。	・1年次より、進路講演会や進路啓発のためのガイダンスに取り組みるとともに、3年生対象の面接および、作文指導等を充実させる。 ・面接指導を全職員で実施し、学校を挙げた指導体制・雰囲気づくりに努める。 ・大学進学希望者には早い段階から大学見学、進学指導を実施する。	B	・卒業までに3年生ほぼ全員の進路先が決定した。 ・私立大学8名、農業大学校4名の実績を残したものの、国立大学に進む者はいなかった。 ・公務員は2名(市役所1名、自衛官1名)の実績であった。	・来年度も引き続き、1年次からの進路啓発に向けた講演会やLHR、3年次の全職員による面接指導等を含め、学校を挙げた指導体制・雰囲気づくりに努め、全生徒の進路希望実現につなげたい。 ・大学進学に向けては、引き続き、進路指導部・学科・学年が連携した指導の充実にも努める一方、今年度以上の成果が残せるよう、生徒・保護者への情報提供と進学意識の高揚と啓発に努める。
		キャリア教育の充実が図られたか	・希望進路の早期決定につながるようインターンシップを充実させる。	・進路指導、各学年、各学科が連携し、分掌ごとの行事やキャリア教育を効果的に融合させ、生徒個々人の進路希望の情報共有を密にすることで、早期の希望進路決定につなげる。 ・2年次のインターンシップは就職実績のある企業での実施率を高める。	B	・3年学年団と進路指導部との連携は十分に取れていたが、学科との連携が不十分であった。また、生徒の適性に応じた進路指導ができず1次試験で内定をもらえない生徒がいた。	・各学年との連携を図り、学年に応じた進路指導を効果的に行う必要がある。特に2年学年はキャリア教育の一貫としてインターンシップを実施しているが、進路希望と一致していない場合が多く、より学科と学年との連携をとり、進路に繋がるインターンシップを実施する。
⑤危機管理意識の向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○危機管理安全対策	事故防止への意識向上が図られたか	・授業・部活動や登下校時の事故(要報告分)の、前年比半減をめざす。	・授業・部活動での事故防止及び発生時の緊急体制等に向け、研修会等を実施し、生徒・指導者の安全確保に対する意識を高める。 ・校内各所の安全点検を強化し、事務部とも連携した未然防止対策を積極的に行う。 ・緊急時の迅速かつ的確な対応と連絡(一斉メール配信)を行う。	B	・部活動休業日と会議等を水曜日に設定し、生徒だけの練習にならないよう配慮した。 ・校内の外灯の増設、ひし、壁等の修理を大幅に行い、夜間の安全確保対策を行った。	・生活事故については、部活動を中心に体育や農業実習等を含め、危険予知と生徒の安全確保に向けた指導を徹底する。 ・交通事故防止に向けては、交通講話等の実施はもとより、校外での交通指導を行うことで、安全意識向上に向けた指導の強化を図る。
⑥部活動の推進とボランティア活動の充実							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○生徒会活動	部活動の推進が図られたか	・1年生は全員部活動加入であり、2、3年生の部活動加入率も80%以上をめざす。 ・県総体や新人戦等で、昨年以上の大会入賞をめざす。	・日々の活動をおとして、部活動の意義や効果等を理解させる。また、未加入者に対し、担任・学科の連携により加入促進の指導に努める。 ・日々の練習により体力・技術の向上に努めるとともに、練習試合等をおして競技力向上を図る。	B	・カヌー一部は県総体で総合3位に入賞した。九州総体やインターハイでは個人やチーム競技で出場したが受賞にはつながらなかった。太鼓部はさが全国総文祭や多くのイベントで演奏するなど活躍した。 ・2、3年生の部活動の加入率は、54%と目標には届かなかった。	・多くの部活動が一つのチームとなり、2学期以降活動してきた。しかし、両キャンパス間の移動のため、練習時間が短くなっており、それを克服する指導方法の改善を図り、部活動の活性化につなげたい。
	○ボランティア活動	ボランティア活動に取り組む生徒の意識が高まったか	・生徒のアンケートで、ボランティア活動の大切さを理解し、意欲的に取り組む生徒の割合を80%以上にする。	・地域に向向いての学校全体あがりの継続的なボランティア活動や地域との交流活動に取り組む。 ・学期ごとにボランティア週間の設定し、プチボランティアに取り組ませる。	C	・生徒アンケートでボランティアの意識が高まったと答える生徒が64%に留まった。 ・今年度は農業文化祭前の清掃ボランティアのみ開催し、3学期に予定していた地域清掃ボランティアが中止となった。	・地域へ向向いての全校ボランティアを、学期ごと実施したり、商業キャンパスとの合同開催も今後検討していく。 ・部活動や学科でのプチボランティアも、機会を見つけ実施していく。

⑦働き方改革の推進							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的な評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善と教職員の働き方改革の推進	学校行事の精選と効率的運営が図れたか	<ul style="list-style-type: none"> 講演会等の行事の精選を行う。 体育祭・文化祭等の企画内容・役割分担の見直しを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に必要な行事の観点から精選を行い、企画・準備等の負担を減らしていく。 準備期間の長い行事の内容と役割分担で負担の分散を行うよう見直しを図る。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 会議や研修等の設定については、水曜日をベースに行うことで、他の曜日や定期考査の午後の時間帯に余裕を持たせることができた。 体育祭や文化祭の準備期間を、昨年度より短くしたが、効率的に準備が進めることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> キャンパス単独での行事や合同での行事開催に向けて、両キャンパス間の連携を密に行い、行事の精選と効率的運営をさらに進めていく。
		部活動指導の効率的運営が図れたか	<ul style="list-style-type: none"> 適切な部活動休養日の設定を行う。 顧問間の指導日の連携を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 各部活動、週当たり2日以上休養日を設定し、効果的な指導方法の展開を図る。 複数顧問の交代での指導体制を推進する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 部活動に週当たり2日以上休養日を設定すること、複数顧問配置により、効率的なメリハリのある部活指導がなされている。 部活動の休養日が増えた影響からか、時間外業務時間は、月平均35時間と昨年度より、5時間程縮減できた。 	<ul style="list-style-type: none"> 部活動の効率的運営がなされつつあるが、部活動によっては、指導時間や指導方法の偏りが見られる。次年度は働き方改革の観点から是正を図りたい。

●は共通評価項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目

本年度は、農業クラブ活動(農業クラブ県大会発表部門での躍進)や地域と連携した研究活動・交流活動(農業文化祭や生産物販売会、公開講座等での教育内容のPR)等、大いに評価できるものもあった。しかしながら、服装や頭髪を含めたマナー指導の取組、そして、基礎学力の向上と定着等、工夫・改善を要するものもある。目標とする進路保障は確実に行うことができた。部活動等では、カヌー、太鼓部等で結果を残すことができ、今後のさらなる活躍が期待される。働き方改革については、部活動指導の面で工夫改善が見られ、時間外業務時間は、月平均35時間と職員の意識が高まりつつある。次年度は、さまざまな課題に検討を重ねていき、欠かすことができない取組や評価できるものについては継続的に取り組む一方、精選すべきものや改善が必要なものは、廃止を含め、十分な見直しを行なったうえで取り組んでいきたい。